

碑文 訳

御殿山記念碑

正四位伯爵藤堂高紹篆額

謹んで調べるに、我が藩祖藤堂高通公は、寛文九年に初めて久居に領地を貰い、翌年の八月に荒れ地を開拓して城を造り政治を始めると、公の評判を聞き慕う住民は四方から集まって、たちまち民家が軒を連ねるようになった。公はそこで寛文十一年（一六七一年）七月十七日、初めて入城されたが、久居の町の建設は正にこの時になったのである。その後約二百年、第十六代高邦公の藩籍を朝廷にお返しするまで、立派な君主が相継いで出られ、御自ら儉約に励み、思い遣りのある政治を行って、武士や住民を可愛がられたので、公の徳の感化が広く及んで領民はそれぞれの仕事を楽しんだ。中でも

たかえだ

たかさわ

八代高朶・十二代高兌の二公は、飢饉に備えて義倉を創設せ

たかかつ

たかより

ほんそう

られ、十四代高栴公が文学を奨励され、十五代高聴公が畚插

（ふごや鋤）を執って、荒れ地を開拓されたような、際立った政治的な功績はすべて記し切れない。そうして町民は何時も恩恵を受け家畜は日と共に繁殖していった。

藩が廃止された後、町の勢いは急に衰え、ほとんど昔の状

態をなくしたが、明治四十一年に津衛戍部隊が郊外に置かれた時から人口が俄かに増加し、産業もそれにつれて発達し、大正九年十月一日現在で世帯数一千百八十五に達するようになった。町民はその因る所を忘れないで、藩祖が此の町を創建されたご恩を慕い仰ぎ、歴代の藩公がいずれも慈しみ育ててくれた恩恵を慕ってやまない。以前高通公を八幡神社に併せ祀っていたが、明治の初めに旧城跡に合祀して、久居神社と呼び、その後又、八幡神社に合祀して、野辺野神社と呼んで現在に至っている。町民が藩祖を敬うことの慎み深いことは初めから変わることなく、今では祖公の入城から丁度二百年を隔てることになった。町民は相談して資金を集め、碑を久居神社の跡である旧城跡に建て、その由来を刻み町民の追慕の誠を表し併せて町の創設を末永く記念しようとして、その文を嘉衛に求めた。嘉衛はもと旧久居藩の儒官（儒学で使える官）の末席に連なっていたので、その情誼（真心のこもった付き合い）からも断れないので謹んで文を書いて子孫に告げるものである。

大正拾年十一月

佐野嘉衛撰併書